

## ブーランとその教理

—マリア派異端とユイスマンス (その3)<sup>1</sup>—

大野英士

### 0.

大革命後の象徴的審級の失墜から生じたオカルト現象である聖母マリアの出現の周辺に蠢く異端宗派の流れをくむブーラン元神父 Joseph-Antoine Boullan (1824-1893) の、オカルト＝神秘主義的なシステムは、彼が、同じく異端宗派の教祖ユージェーヌ・ヴァントラ Pierre-Michel-Élie Eugène Vintras (1807-1875) の死後、ヴァントラから彼のセクト「慈悲の御業」の後継者に指名されたと称してリヨンで布教を始めた 1875 年頃に、完成されたものと思われる。ブーランの教説は主として、「修復」概念と「第三の支配」ないし「パラクレ (助け主＝精霊) 崇拜」からなる。このうち「修復」の教説は、1875 年にブーランがカトリック教会から破門される以前にはほとんど最終的な形態に練り上げられていた。一方、「第三の支配」とよばれる精霊信仰を中心とした終末論的な世界観は、ヴァントラの教団からブーランが引き継ぎ、少なからぬ改変を加えて、彼独自のシステムの中に包摂したものである。いずれにせよこの二つの「思想」は、互いに相容れないものではない。それどころか、ある意味で同じ宗教的な伝統に由来し、しばしばイデオロギーや宗教的なシンボルすら共有してきた近縁関係にある教説である。小論では、ブーランの教説の柱となる「修復」と「第三の支配」、および、彼の宗派が「カバラの薔薇十字派」をはじめとし、世の指弾の的となった「生命の交わり」に関して、その論理的な構成を明らかにしたい。

### 1.

「修復」という教理をカトリック教会が公認するのははるか後年の 1928 年、回勅「ミゼレンティシムス・レデンプトール (いとも慈悲深き贖い主)」によってである。しかし、この概念自体はカトリシズムの圏内ではとりたてておかしい思想ではない。カトリック教会の最近の解釈は、この教理を次のように整理している。

主の到来が常に目前に迫っている（「マタイによる福音書」24 章 42 節）ことに鑑み、秘蹟によって主キリストに結ばれ（「ヨハネによる福音書」15 章 5 節）、人類を愛徳のうちにつつまこむ教会は、罪深い信徒の過ちをすみやかに「修復」することを望んでいる。キリストの浄配たる教会の心は、「慰め主なる」精霊（「雅歌」69 章 21 節）によってキリストへの思いに燃え立ち、ご自身の子の血を与えた（「使徒行伝」20 章 28 節）「自分に属するもの」（「ヨハネによる福音書」1 章 11 節）である、この民の忘恩に傷ついた救世主の御心に、つましく、「愛によって愛を返したいという思い」（「ヨハネによる福音書」21 章 17 節）を抱くのである。<sup>2</sup>

実践の面では、特別な祈りを捧げたり、身体的・精神的な苦痛を受け入れることによって、不信心者によって絶えず犯される神への冒瀆行為、忘恩行為を贖罪することを指している。グロタンによれば、この「修復」という理念は、中世の「アマンド・オノラブル（公然告白の刑）」から、語彙や、シンボルを引き継いでいるという。これは、神への冒瀆、暴動参加、貨幣偽造、偽装倒産、流血犯罪、暴行、「配偶者に対する重大な侮辱」などの罪に対し、自分が犯した罪を公衆の面前で告白し、恥辱を身に引き受けることで、罪の許しを受けるという刑罰だが、その背後には文化人類学的あるいは精神分析学的な欲望の力学が働いている。これらの罪は、「欲望や攻撃性」に基礎をもち、具体的にはセックスや暴力、お金に関わる、いわば精神・身体の発達段階の中では「古層」に属する犯罪だ。こうした罪を償うため、「犠牲」的な性格をもった「象徴的な」行為を行うことによって、衝突と復讐の連鎖を断ち切ろうというのだ。

「犠牲」とは、もちろん、もともとユダヤ＝キリスト教の文化において、「生け贄」となる獣を屠って神との間に愛のもとづく交流をおこなうという形が原形だが、相手に損害を与えたことによって生じた「借財」を同じ価値の財物で購うという意味もある。ただし、この場合、「目には目を」「歯には歯を」という文字通りの報復制裁ではなく、自分の身に「恥辱」を引き受けるのである。また、倫理的な「借財」「借金」を暴力に訴えることなく返済し、犠牲者の許しを得るには、もともとの不正が消滅し、損害が償われる必要がある。ここから「修復」と「犠牲」という二つの思想が交わる根拠が生じてくる。

キリスト教においても「犠牲」という観念はその中心に位置している。キリストの十字架の犠牲は、神が自分の子であるイエスを人間のために犠牲に捧げたことだとされる。しかし「三位一体」によって父なる神は、子なるキリストと同一であるから、神は人類への愛のため、人類の犯した罪を償うために、自分の「血」を流したことになる。

したがって、人間がこのキリストによる「血の犠牲」を忘れることは、人間と救い主である神との間の「貸借関係」のバランスを崩すことになる。そこで「聖なる心<sup>カレ・クール</sup>」に傷を受けた神は、人間に神への忘恩を非難し、相応の償いを行うように人間に要求する。神の代理人である教会が墮落して役に立たないとみると、キリスト自身が姿を現したり、聖母マリアや大天使を遣わして、借金の取り立てを行うのだ。これが、19世紀に頻発した「聖なるもの」の出現という民衆起源の「オカルト現象」のイデオロギー的な背景だ。

「修復」という霊的な原理が活発になるのは、1675年、キリストがマルグリット＝マリー・ダラコック Marguerite-Marie d'Alacoque (1647-1690) の前に現れてからと言われている。「修復」の思潮は、その後、ヨーロッパ全土に広がっていった。そして、19世紀に入ると、王政復古の後、革命やナポレオン戦争の過程で教会や神に対して犯された罪に対する民衆レベルの罪責感を背景に、「修復」に対する新たな熱意が生じる。そして、すでに述べたように、キリストや聖母が直接現れて、民衆に対して預言を行うというもう一つの「伝統」、とりわけ1846年のラ・サレットの聖母マリア出現と結びつくことによって、極めて奇妙な発展を遂げるのである。

## II.

それではブーランの「修復」の教理は、どの点で、「正統」とは異なるのだろうか。ブーランが詐

欺と風俗壊乱の罪で裁判所に告発される以前の 1857 年に書いた『真正なる修復』という 360 ページの書物がある。<sup>3</sup> この書物を読むと、彼の修復理論が当時の修復運動と多くの共通点を有しているのがわかる。

1. 神秘主義、とくに超自然現象や奇跡に対する強い嗜好がみられる。
2. ラ・サレットの聖母出現、および聖母がメラニー・カルヴァ Mélanie Calvat (1831-1904)、マクシマン・ジロー Maximin Giraud (1835-1875) に与えた「秘密」に対する深い思い入れがある。
3. 世界の終わりが切迫していることを告知らせる終末論的な傾向。
4. 特に、日曜礼拝を守らないこと、神に対して冒瀆的な言葉を口にするにすることに対する神の怒り、神による処罰が強調される。
5. 最近おこったあらゆる事件を、神の意志との関連で解釈する特異な歴史解釈。この観点から、特に、フランス革命との関連から「修復」の必要が論じられる。

従って、ブーランの主張が以上の枠内に収まっている限りは、少なくとも「正統」信仰に抵触することはない。実際、ブーランがユイスマンス J.-K. Huysmans (1847-1907) に強調しているように、4 この書物は発売から 3 年で第 3 版が出るなど、当時の読者にはとても好評だった。いや、驚くべきことに、ブーランがカトリック教会を破門にされた後も版を重ね、1887 年には第 8 版が出版されているのである。<sup>5</sup>

しかし、この著作の後、ブーランは修復による贖罪の構造に、これと関わりの深い罪と病の関係、さらには「功德の転換」réversibilitéと呼ばれる教理をめぐる、無視し得ない変更を加えることになる。

きっかけになった事件は 1860 年頃起こったらしい。ブーランは個人的な手帳の中にこう書き記している。

アンヌ＝マリーは病気だった。私はこの病がトリエルの司祭が送った呪いが原因で起こったことを知っていた。呪いをかけられると助からないのが普通だが、清めた白ワインによって治癒した。

この時、私は以下のことを理解した。つまり、病同様、罪も場所を変えるのだ。そして、別の人間のうちで活動し、効果を現すのだ。<sup>6</sup>

ここで、アンヌ＝マリーといわれているのはアデル・シュヴァリエ Adèle Chevalier のことだ。<sup>7</sup> まず、確認しておかなければならないのは、もともと、ブーランにとって、呪いと罪とはほとんど同じものを意味しているということだ。その上で、ブーランは、病と罪になにか共通のベースがあると結論づけるのだ。罪や呪いは簡単に病に転換する。だから罪や呪いは病が人から人へと伝染するのと同様、ある人から別の人へと移転させることが可能なのだ。

神が超自然的な特別の恩寵状態へと引き上げた多くの聖者や聖女の人生をたどると、自分とは無関係な、他の人びとの病を自分の身に引き受けて苦しんだといわれる事例が多々みられる。一言でいえば、彼らが自

分本来のものではない病に冒されたことで、他の人間が救われたというのである。

ここから私は、罪もまた、修復を祈願する魂が同意すれば、他の人間に移すことができないことがあるだろうか、どうしてそれを厭わしく思うゆえんがあるだろうか、と思うようになった。<sup>8</sup>

1857年版の『修復の魂』の中では、ブーランはジョゼフ・ド・メーストル Joseph de Maistre (1753-1821) を参照しながら「功德の転換」の教理を紹介していた。しかし、1860年の発見を契機に、「功德の転換」と「神秘的な身代わり」が彼の修復理論において中心的な位置を占めるようになってくる。

修復の基底にあり、まさしくこの教理の真の要石となるのは、罪が可能性として転換しうるということではなく、罪が実際に転換するということだ。ある人間が、それを受け入れることを了承すれば、他人の罪がその存在と種別はそのままに、ある人間から別の人間に移るのである。

ある人間から別の人間への罪の移動は、きわめて確実な方法で検証し、確認することのできる事実なのだ。<sup>9</sup>

ブーランの体系においては、罪と呪いとは通底しあっている。そこで、上に述べた原理から、ブーランが修復や、呪い返しのの修法を行う際の一般的な戦略が導き出される。つまり、ブーランは、修復行為や、悪魔祓い（呪い返し）の志願者に、他人の罪や呪いをまず自分の身体に引き受けたうえで、キリストの力を借りて、その効力を弱めたり、消滅させたりしようというのだ。もうすこし具体的なイメージを借りれば、修復を行う者の身体はここで一種の「容器」のようなものとして考えられている。そこにあらゆる種類の罪や呪いを詰め込んで、キリストという殺菌剤ですっかり消毒してしまおうというわけだ。

しかし、他人の罪を自分に引き受ければ、自分も無垢な善人のままにとどまるというわけにはいかない。身体の中に取り込んだ罪によって、一時的にしろ、自分も罪に汚れた存在になる。これは、一歩間違えば、悪を滅ぼすため、自分もまた悪に染まることも辞さないという論理にも転化しかねない危うさをもっていることを指摘しておこう。マルセル・トマはブーランの教説に17世紀の静寂派（ケユイエティスト）の影響があるのではないかと疑っている。

修復を志願するというのは、我々が自分自身の罪を償い清めた限りにおいて、我々の兄弟の罪を引き受けることに同意することだ。それは、我々の身のうちにあり、また我々に授けられる生成の恩寵の加護をうけて、イエス＝キリストの徳により、罪の重みに耐え、罪を我々の身体のうちで滅ぼすことなのである。

このように、聖なる修復の御業においては、罪は、それを犯した人間のうちにあった時と同じ属性、種別、性格をもち、実にさまざまな形態を取って、我々のうちに存在する。修復を行う魂は、自分の身体の中に、罪人の身体にあったままの罪を体験し、感じもするのだ。修復を行う魂は、悪や、欠点や、情念のあらゆる局面、あらゆる進行を確認し、一言で言えば、罪の法則のあらゆる危機を被ることになるのである。<sup>10</sup>

### III.

『聖性年報』の中でブーランが述べている計画によれば、「修復」は三つの段階を経て実行されるという。

まず第1段階、修復志願者は自分の身体に「どんな科学的な手段を用いても原因が分からず、人間の技術で治すことができない」<sup>11</sup> 病気や苦痛を引き受ける。ブーランは、人間の医学では治せない病を二つのカテゴリーに分けている。悪魔的な病と神秘的な病だ。

悪魔的な病とは、黒魔術を使う悪魔の代理人が送りつけてくる呪いが原因で起こり、病人を悪魔の影響のもとに置く病のことだ。一方、神秘的な病というのは、神が修復を行うために選んだ特別な人間に与える病だという。外見的にはこの二つの病は全く区別がつかない。二つを見分けることができるのは、神秘学やそれと表裏一体の関係にある悪魔学に通じた専門家だけだ。ブーランによれば、フランスやヨーロッパのいたるところに、そしてとくに精神病院には、悪魔の代理人が送りつける呪詛の犠牲となった人びとがおびただしい数いる。「神から特別な霊的能力を賦与された人びと」は、こうした悪魔的な病を治療する義務がある。ブーランが、従事してきたのは、まさにそうした治療であり、しかも「しばしば成功を収め」てきたというのだ。

しかし、もう一つ、「神秘的」と呼ばれるジャンルの病気がある。これは、神から選ばれた敬虔な魂をもった人物が、キリストの代わりに犠牲的な行為を行うため、自らすすんで自分の身に引き受ける病だ。そしてこのように積極的な贖罪として、他者の病気を自分が肩代わりする行為のことを「神秘的な身代わり」という。悪魔的病同様、医学的には原因不明だが、呪いによって起こるのではなく、それ自体が神の恩寵なのである。

自ら犠牲になったことから生じた病、最初から自らすすんで病を受け入れたことに起源があったり、よく見られるように、隣人・同胞のために祈りを捧げた結果発症した病については、これを治してはならない。ただ、義人の魂が引き受けた荷物の重さにつぶれてしまわないように、適切な限度にとどめてやる必要がある。

ああ、我々はよく知っているが、現在、世界には、おそろしい量の呪詛が行われている。しかし、修道院や一般の家庭で、おびただしい数の魂が「身代わり」が原因と考える以外、説明のつかない病に苦しんでいる。彼らこそ、一言でいって、修復の御業に従う魂なのだ。<sup>12</sup>

修復の第二の段階は、犯した罪に対して下された罰としての病を受け入れるだけでなく、「身代わり」という手段を用いて魂の中にある「罪」——他人が犯した罪を引き受けることである。さらに、第三段階においては、地獄に巣くう悪霊達と戦い、彼ら全員を屈服させるキリストの姿にならって、ブーランは修復に従う魂を「結集」して、悪魔に対して直接的な戦いを挑むといったことを考えていたようだ。ブーランはこの戦いが、「筆舌に尽くせないほど、苦しく、難しく、激しい」戦いだと述べているが、それでは、彼は具体的には何をしようとしていたのだろうか？ この点になるとブーランの説明は最後まで曖昧なままだ。ブーランが示唆しているのは、この神秘的修法の最後の段階は、聖母マリアやラ・サレットの秘密と何らかの関係があるらしいということだけだ。

リチャード・グリフィスは、ブーランが修復の第三段階で行おうとしていたのは一種の悪魔祓いの儀式だと言っている。<sup>13</sup> しかし、それではすこし辻褄があわないことになる。なぜならブーランにとって悪魔祓いは秘密でもなんでもなく、むしろ彼の最も公然たる活動に属しているからだ。事実、異端とは無縁のカトリック教会内部でも、悪魔祓い師としてのブーランの声望は高く、すでに前稿で名前をあげた<sup>14</sup>オーギュスタン・ブーラン Augustin François Poulain (1836-1919) やタルディフ・ド・モワドレー Tardif de Moidrey (1828-1879) といった篤実な聖職者達からも尊敬を集めていた

のである。

我々としては、修復の第三段階に関して、少なくとも以下の三点を確認しておくにとどめよう。

1. この段階においても、中心となるのは、「病気や、誘惑や、罪は移転可能であり、他人の病、誘惑、罪を自分の身体に引き受けることができる」という「身代わりの原則」である。
2. ただし、戦う対象は、「肉や血」に関わる誘惑ではなく、霊的な力が原因となるような誘惑である。
3. この段階の御業を達成するためには、「昼も夜も犠牲の祭壇で心身を捧げる清浄で聖なる魂の軍団」を動員する必要がある。

ブーランが修復を目的とする修道会を設立しようとしたのも、本来はこのような見通しにたったのことだったようだ。カトリック教会を離脱し、ヴァントラのセクトに接近した後も、修復に関するブーランの考え方には大筋で変化が見られない。二つの異端セクトの思想は歴史的にも、教理の面でも、極めて近い関係にあるが、この親近性のおかげで、ブーランは自分が作り上げた教義をヴァントラの教義に接合することができたのだろう。

#### IV.

さて、ブーランの教理のもう一つの重要な柱は、修復＝贖罪の儀式において女性に与えられた特別な地位だ。

ブーランは1875年以降、ヴァントラのセクトの分派をつくり、「近い将来におけるパラクレ（助け主）の到来」と、「栄光のキリストの回帰」を柱とする教えを布教し始めた。修復の教義と同様「第三の支配」の教義も、カトリックの正統教義のなかに典拠があり、それ自体としては全く「異端」ではない。

創世記以来、世界の歴史は、五つの祝福と三つの支配によって特徴づけられるそれぞれの時代に区分される。

精霊が君臨する第三の支配は、第五の祝福の行われる時代に実現するといわれる。

1840年6月11日、ヴァントラの幻視のなかに現れた聖ヨセフによれば、神は過去に四度、人類を祝福したのだという。

第一の祝福において、神はアダムを彼の一族の繁栄に対して祝福した。第二の祝福では、人類の再生に対してノアと彼の家族を。第三の祝福においては、アブラハムを、あらゆる人間がイエス＝キリストを信仰する使命をもっていることに対して。第四の祝福は、神みずからが御子を地上に遣わし贖罪の御業にあたらせるという貴重な恩沢に対して、イエス＝キリストを祝福した……。

一方、三段階の「支配」は父・子・精霊というカトリックの神の三位一体のそれぞれの位格（ペルソナ）に対応している。モーセからイエス＝キリストまでは第一の支配と呼ばれ、世界は旧約の父なる神の支配におかれていたとされる。怒れる父の支配する恐怖の時代である。次いで、キリストから（19世紀半ばの）現代までの第二の支配は、新約の神、すなわち子なるキリストの支配する恩寵と贖罪の時代である。そしてやがて訪れる第三の支配は、ヨハネ福音書の神である精霊の支配する贖罪と

愛の時代だとされる。第五の祝福の時代に実現する第三の最後の支配は、勝利のキリストの再臨と、しばしば「助け主」<sup>ベラッレ</sup><sup>15</sup> と呼ばれる精霊が新たに世に満ちひろがり、地上に神の愛を教え知らしめることになるのだ。

ヴァントラのセクトは人類をもともと天上に属し、天使の名前をもって、清浄で無垢な男女両性具有の生を享受していたと考えていた。実際、セクトに入信した信者には、ガブリエルやラファエルを始めとする天使の名前にちなんで、-エルで終わる名前が与えられた。

精霊の到来は再生の時代の訪れを告げるものだという。この時代にあっては、「信者をキリストの優しい御心のうちに導く、燃えるような慈悲が、恩寵と聖性によって贖罪の御業を栄えあるものとする」<sup>16</sup> のである。

しかし、このような「慈悲の奇跡」が「おびただしい悲惨と、闇と腐敗」の中に沈み込んだ「啓蒙の世紀」にどうしたら実現するというのだろうか？

当時の多くの宗教運動や神秘主義と同じように、ヴァントラのセクトは、イエスの聖<sup>サクレ・クール</sup>心の重要性、あるいはとりわけ、「慈悲の母」聖母マリアの加護の力を強調し、これらに頼って、神の怒りをなだめ、精霊の到来に対して人間に心の準備をさせようとはかった。このため、「慈悲の御業」の信者達は、聖母マリアの加護を仰ぐ目に見える証しとして、「恩寵の十字架」と呼ばれる特別な十字架を身につけた。

ヴァントラのセクトの教理によれば、人間は、イエスや精霊に対して直接働きかけることはできない。いかなる神の恵みを要請するにも、女性という「審級」、より具体的には聖母マリアを経由しなければならないのだ。

彼女（聖母マリア）が関わらない救いの御業などあるだろうか？ 慈愛深い母である聖母マリアはあらゆる神の恩寵の通路である。まさに奇跡の日々にこそ、聖母マリアは罪人の避難所というこの美しい称号にふさわしい方であることをかつてないほどお示しになるだろう。数々の預言は語っている。聖母は契約の櫃であり、神の御業の最初の使徒であると。救世主イエスが父の哀れみを求めるのも聖母の祈りに応じてのことであり、イエスが人間の上に新たな精霊を招きくださるのも聖母の祈りがあればこそである。新たな精霊の到来する時、人間はもはや肉の存在から浄化されるのだ。<sup>17</sup>

聖母マリアに関するヴァントラの「神学」は、1843年に出版された『セプテーヌの声』第三巻<sup>18</sup>でもすでに言及されているが、その全体が、まとまった形で表明されたのは、ヴァントラが神からローマ教会に代わる「エリアの祭司職」に叙せられたという1850年以降、『マリアの犠牲の弥撒』*Sacrifice Provictimal de Marie*<sup>19</sup>と称する典礼の中でのことだ。

ブーランは、このような聖母マリアに対する特異な執着をヴァントラと共有していた。ブーランは、1875年以降、ヴァントラのセクトの教義や儀式を自分の教義の中にそっくり取り入れたが、それが可能になったのも、聖母マリアへの執着という共通点があったからだった。『マリアの犠牲の弥撒』の執筆者はヴァントラであるが、ブーランは、ヴァントラの教義に「改宗」した後、自分がイニシアティブをとって、この書物を印刷させている。

栄光に満ちた精霊の支配は近づいている。しかし人類の再生が約束されている、この精霊の支配の到来を早めるために、「カルメルの子供たち」あるいは「慈悲の兄弟」たち（いずれも「慈悲の御業」

の別名)は、「犠牲」や「修復」の儀礼を執り行う必要がある。『マリアの犠牲の弥撒』もそうした儀礼の一つだ。この弥撒典礼のテキストにおいて語られるヴァントラ＝ブーランの教説のなかには、異端的な性格の強い聖母マリア信仰と、伝統的な精霊信仰とが奇妙な思弁によって結びつけられている。

## V.

『マリアの犠牲の弥撒』の内容をかいつまんで述べてみよう。

「慈悲の御業」の信者は「非被造の神智」と呼ばれる形而上学的な第一原因を想定する。ヴァントラ派やブーラン派セクトが考える「非被造の神智」というのは、聖母マリアが「具現する」女性的な側面を賦与された精霊と同じものだと考えられる。<sup>20</sup> ロベール・アマドゥーの言葉によれば、「神が、その前で、それと向き合い、それとの関係で自らを確立し、自分が三位一体の神であることを自覚する女性的な性格」<sup>21</sup> である。

ヴァントラ＝ブーランの「神智学」<sup>ソフィオロジー</sup>は聖母マリアに、マリアは「第一の天使」だというわけで、「シャアエル」という特別な呼び名を与える。「非被造の神智」は、「それ自体で存在し」「他のいかなる助けを借りることなく自分自身からすべてのものを作り出す」「無限の本質」であり、創造者であるが、マリアは「被造物」であり「神」の本質を欠いているため、「非被造の神智」の「変わることはない反映」である「被造の神智」であるにすぎない。

「被造の神智」であり「非被造の神智の反映」であるというこのマリア＝シャアエルの根源的性格とならんで、彼女が、「現実の世界に現れた、時には受肉した女性原理」<sup>22</sup> であることから、幾つかの副次的な性格が引き出されることになる。

まず、贖罪と修復の経済の観点から、「原罪なくして受胎した」マリアの媒介者としての性格が強調される。ヴァントラのセクトは、1854年、ローマ教会が公認する以前に、「聖母マリアの無原罪の御宿り」<sup>インマキュレ・コンセプション</sup>の教義を主張していた。人類はイヴのために墮落し、エデンの園を追放された。しかし、マリアは男女の性交の結果子供が生まれるという通常の人間の生殖原理からはずれ、聖アンナの胎内に奇跡によって受肉したというのである。「聖母マリアの無原罪の御宿り」という教義はこのようなマリア自身の生誕の起源を考えて始めて意味をもつ。前もって、「淫欲の不純な残滓」や「官能的で、動物的で、地上的な魂」<sup>23</sup> など、イヴの属性から解放されている完全な処女であるマリアは、「女であるという本性によって」、「人類全体に毒をまき散らす腐敗の瘴気を追い払うため、神によって特に作られたパン種」<sup>24</sup> であると考えられる。イヴは人類の破滅の原因であったが、マリアは人類の修復のもととなる。イエスは人類の罪を贖うために受肉したわけだが、マリアは、イエスに肉の身体を与えることで、贖い主がこの世に現れる道筋を準備したのだ。人類の救済のためには、神の血が流されることが不可欠だったが、マリアの献身と同意がなければ、そもそもその血がこの世に存在することはあり得なかったわけである。この意味で、マリアは「我々の生の希望であり、イエス＝キリストと共に人類を救う贖い主であり、生けるものたちの真の母である」という。<sup>25</sup>

興味深いことに、ヴァントラ＝ブーランの教説は、マリアの「移行機能」を強調している。被造の神智であるマリアは常に非被造の神智に先立って現れ、「言葉」の受肉を準備し、仲介の役割を果たす。「マリアが現れたのは、ひとえに、“言葉”が受肉するのを助ける道具となるためであり、母として言葉に結びつくことによって、言葉が人びとの間に棲まうという、いとも心を慰める奇跡の補完物



となる」<sup>26</sup> ためである。「被造の神智は非被造の神智に先立って現れなければならなかったのであり、被造の神智は非被造の神智の現れる道の端緒なのである」<sup>27</sup>

つまり、イエス＝キリストによる栄光に輝く支配が実現し、精霊の愛がこの世に満ちあふれるのは、マリアという形象に受肉した女性原理の働きによるのだ。だから、「カルメルの子供たち」あるいは「慈悲の兄弟たち」は、精霊の妻であり、神の母たるマリア＝シャアエルが放つ慈愛の光に祈りを捧げるようにすすめられる。

おお、カルメルよ。マリアの霊の象徴であるあの光が、我らに教えてくれる。我らが女王、我らが母を通じて、イエスのもとに赴かなければならない。マリアを通じて、我らの贖いであり、我らが救いであり、我らが生命である尊い救い主と結ばれることをめざして。我らは栄光に満ちた支配の日に、かの救い主とともに君臨し、栄光の神のみ国に帰り、とこしえにこの世を統べることになるのだ。<sup>28</sup>

さらに、このセクトの特異性をきわだたせるもう一つの特徴は、カトリック教会においては、現在にいたるまで、聖職者になれるのは男性に限られているのに対し、女性に特別な地位を与えていたことだ。

ヴァントラ＝ブーランの異端カルメル会では、ミサの典礼は「女祭司」ないし「強き女」*femme forte* と呼ばれる女性信者によって執行された。救いを求める時、どうしてこのセクトは現実の女に頼るかという論理は、すでに述べたマリアに対する「形而上学的」な思弁のなかに探ることができる。

非被造の神智の反映である「被造の神智」であるにすぎない以上、マリアは、本来の意味での「神性」を持っているわけではない。彼女は被造物にすぎないという意味で、肉体を持った他の女性と変わるところはない。『マリアの犠牲の弥撒』のテキストに「シャアエルの精神と美德とは、イヴに伝えられ、代々、我らの母に分与された」<sup>29</sup> とあるように、言葉を代えれば、「現実」の女たちも、マリアと同じ「女性原理」を分かち持っていることになる。異端カルメル会の「女祭司」の場合、聖母から彼女の精神と美德とを受け取けとることにより、女性的な叡智 *Sagesse* を強化されるというのである。

キリスト教的な伝統の中では、女性は、蛇＝悪魔にそそのかされて、最初の人間アダムを誘惑し、人類を墮落させる原因を作ったとして常に非難の対象になってきた。しかし、栄光の天にて世を統べる「我らが母であるシャアエル」であるマリアの精神と美德は、限りある生の条件の中に生きる「選ばれた女」に伝えられる。「イヴのなかのイヴ、新しき救世のジャンヌ」であるこの選ばれた女は、こうして「現世における強き女」となり、この神秘的な資格で、「勝利するキリスト」の到来を準備し、彼の輝かしい支配の実現した世界において、人類の更正と革新を司ることになるのだという。

マリア＝シャアエルとは、「普遍的な仲介者」として人類に救済をもたらす女であるが、こうした規定はカルメルの女祭司にも当てはめることができる。仲介者であるマリアの仲介者という意味で、二重の仲介者として、典礼を司る権限を付託された女祭司は、マリアの犠牲によって得られた力を世界にもたらすという使命を帯びることになる。

マリアによるイエスとの神秘的な融合が真実のものとならなければならない。我らの教会によって、あらゆる霊的世界の間の聖なる交流が再び回復されなければならない。人類は、ふたたびエデンの園に戻るよ

う働かなければならない。カルメルの子供たちはそこに至る道筋を開こうとしているのであり、我ら聖油を塗られた女たちは、この弥撒をささげて、我らが兄弟・姉妹たちのために、再び光と正義と愛と再生の道を見いだすのだ。<sup>30</sup>

実際、本家のヴァントラのセクト「慈悲の御業」では、「新しいイヴ」という称号を与えられたアルマイエ伯爵夫人 la comtesse d'Armaillé なる女性がセクトの典礼において女祭司の役を務めていたようだ。また、ブーランは女性教皇庁を設け、ジュリー・ティボー Julie Thibault が「カルメルのマリア祭司」Marisiaque du Carmel の名の下に、『聖母マリアの犠牲の弥撒』を執りおこなった。後にユイスマンスの家政婦となり、『大伽藍』*La Cathédrale* (1898) のバヴォワル夫人の「モデル」になった女性である。

## VI.

しかし、救済が現実の女性によって実現される、あるいは少なくとも仲介されるという考えは、もう一つの「教理」と結びついた時、あらゆる性的な放縦に理論的な根拠を与える危険がある。そのもう一つの教理とは「精霊は浄化の力をもっており、その作用は生殖原理にも及ぶ。パラクレの働きにより、生殖器官が汚れを祓われ浄化されると、その時点から、この器官は原罪による欠陥を免れた選ばれた存在を生み出すことができる」<sup>31</sup> ということんでもないものだ。<sup>32</sup>

エリアのカルメル会では、鉱物、植物、動物、人間、天使、霊に至るあらゆる存在からなる一種の階梯を想定していた。このセクトが説く「生命学的階梯の法則」によれば、たとえ無生物であっても、「無意識のレベルでは、秘められた本能が潜んでおり」<sup>33</sup> 魂はそれぞれ物質的な圏域から精神的・霊的圏域へと、この階梯を上っていき、やがて物質の軛から解放されて、最後には、天上の「一者」に融合するのだという。人類の霊的な再生という視点に置かれると、この魂の上昇は個人レベル、集団レベルという二つのレベルでの贖罪と考えられる。こうした一つ一つの魂のことをこのセクトは「アダムの单子」と呼んでいる。アダムの単子は人間の場合もあるし、人間に至らないもっと低次の存在である場合もあるが、それぞれが、自分を高めるために生命の階梯を上昇していかなければならない。しかし同時に、階梯の上位にある者は、階梯の下位にある者が「生命の上昇階段を、一段、また一段と上がっていくのを助けることができる」<sup>34</sup> のだという。

カトリックには「諸聖人の通功」（聖徒の交わり）という教理がある。現世を生きる者も、眠りについた者も、キリストの功德によって信徒全体が一体をなしており、かつての聖人の功德を、現世にいてまだ功德の不足している者にも融通することが可能だという思想である。従って、下位の者は、上位の者に功德を融通できるよう取りなしを頼むことができる。中世に盛んだった巡礼も、この「諸聖人の通交」を一つの根拠にしているといわれる。

異端カルメル会の「生命の交わり」においては、「諸聖人の通交」と、先に述べた「功德の転換」とが入り混じることにより、生命の階梯が集団的な贖罪の階梯となっているということが出来る。<sup>35</sup>

そして、ここからがかなり話がいかかわしくなるのだが、集団的な贖罪のための「生命の伝達」は、「生命の交わり」と名づけられた「秘儀」によって行われるのだという。「生命の交わり」とは何か？「エデンの園からの失墜は罪深い愛の行為によって起こった。人類の贖罪は、まさに宗教的に成就さ

れる愛の営みによって実現することができ、また実現されなければならない」<sup>36</sup>

1887年、オカルト結社「カバラの薔薇十字」のオズワルド・ヴィルト Oswald Wirth (1860-1943) とスタニスラス・ド・ガイタ Stanislas de Guaita (1861-1897) はブーランに対する調査を行い、秘儀法廷の名でブーランに「猥褻な教説」を流布したかどで死刑の判決を下した。そして、ガイタは1891年に出版した本のなかで、ブーランとヴィルトの間に交わされた書簡や、マリア・Mなる女性の「供述書」などをはじめ多くの証拠を提示してブーランの「忌まわしい」教理や実践を暴露した。

エデンの園から失墜する以前の両性具有の「輝かしい靈的身体」を回復するとされる「生命の交わり」とは、スタニスラス・ド・ガイタの非難するところによれば、とりもなおさず、異端カルメル会のメンバーの間に、広く行われている性行為のことだというのである。

ブーランは、罪深い地獄の性交と清らかな天界の性交という二種類の性行為を区別している。性行為が、「生殖の法」le droit de la générationつまり自然の法に従って行われる場合、それは汚辱にまみれた墮落をまねく犯罪である。しかし、同じ性の交わりが、「生出の法」le droit de la procréationによって行われる場合、つまり、靈的に正しい意図をもって、入信の秘儀によって到達することができる「清浄な状態で」行われると、神聖なものに変化するのだ。

秘儀を授けられたセクトの上級者は「あらゆる場面で、生命の階段のあらゆる段階に属する存在と、愛の交わりをかわす」<sup>37</sup> ことが許されている。

生命の交わりが「自らを清浄化し、自らに美德を獲得し、個人として上の階梯に上昇するため」上級の靈位を持った選ばれた人びととの間で行われる時、「叡智の交わり」<sup>38</sup> と呼ばれる。逆に、生命の交わりが、秘儀に与っていない俗界の人びとや、下級の靈位しかもたない自然物や動物との間で、これら恩寵を失った哀れな存在を“浄化”célestifierし、自らの獲得した美德を分け与え、生命の階段を上昇させるために行われる場合、これを「慈悲の交わり」と呼ぶ。

スタニスラス・ド・ガイタは、こうした観察から次のような結論を導きだしている。

道徳や宗教社会学の面で、こうした教説がどんな結果に導かれるかは明らかだ。まず第一が誰彼かまわないう性の放縦であり、時と場所を選ばず破廉恥な行為が行われるようになることだ。第二に、不倫や、近親相姦や獣姦。第三は、夢魔との交接や自慰行為だが、これらは、このセクトの信仰にとって本来的な行為として認められており、称賛に値する秘蹟と考えられているのである。

以上がこの宗派の教理的な基盤である。その神殿は聖なる娼館であり、贖罪の十字架は肉の男根なのである。<sup>39</sup>

## VII.

もちろん、こうした発言は、いわばブーランの不倶戴天の敵からでたものであり、かなりの悪意が入っていることが予想される。

しかし、それにしても、この不可解な教理を我々としては、どう解釈すればよいのだろうか？ これは、単なる頭のいかれた人間が妄想した世迷い言にすぎないのだろうか？ そしてユイスマンスは、この異端の教祖の訳の分からない教理から、一体何を自分の文学のなかに取り入れたというのか？ 次稿以降、我々は、一見すると、キリスト教異端のあちこちから寄せ集めたかにみえる、このわけの

分らない教理の背後に、ある一貫した理路とシステムのあること、そして、それがユイスマンスの文学のなかにどれほど深い痕跡を残しているかを、逐次、跡づけていきたい。

## 註

- 1 この論考は筆者が現在執筆中のユイスマンスに関する研究書『ユイスマンスとオカルティズム（仮題）』（新評論社より近刊予定）を構成する1章として構想されたものをもとに、加筆・修正したものである。この論考の主題である「ブーラン元神父」に関して、筆者は、過去の論文の中でもたびたび言及し、その教理についても部分的に紹介しているが、その情報はいずれも断片的なものにとどまり、ブーランとその教理、ユイスマンスに及ぼした影響について、日本語で詳細に論じるのは今回が初めてである。
- 2 Édouard Glotin, «Réparation», in *Dictionnaire de Spiritualité*, tome VIII, Paris, Beauchesne, 1988, col. 369.
- 3 L'abbé J.-M. de B., [J.-A. Boullan], *La véritable réparation ou l'âme réparatrice par les saintes larmes de Jésus et de Marie avec un choix de prières admirables pour faire la réparation*, 3<sup>e</sup> éd., Paris, Victor Sarlit, Libraire-éditeur, [1857], 1859.
- 4 Lettre de Boullan datée du 9 avril 1891, Fonds Lambert, 8°-Lambert-586.
- 5 カトリック史家エドゥアール・グロタンは『靈性辞典』第8巻（*Dictionnaire de Spiritualité*, tome VIII, *op. cit.*）の「修復」の項に「フランスでは、贖罪の博士アルフォンス・ド・リギュリの著作を何度も版をあらためて刊行することで、この分野の文献の欠如を補っていた。フランス人による最初の総括は、J.-M. de N. 神父による『真正なる修復』（パリ、1857年初版、1887年第8版）*La véritable réparation*, par l'abbé «J.-M. de N.», Paris, 1857, (8<sup>e</sup>, 1887) という形で現れた」と書いている。ところで、ブーランの著作『真正なる修復』は「J.-M. de B. 神父」という縮約された著者名のもとに、1857年に初版が出て、1887年に第8版が出版されている。偶然の符合にしては近似しすぎている。もしこれがグロタンの思い違いで、両者が同一人物だとするなら、ブーランの著作は、現代のカトリック史家の目から見てもそれなりの重要度をもつ書物ということになる。
- 6 Marcel Thomas, «Un aventurier de la mystique: l'abbé Boullan, I., L'Œuvre de Réparation», in *La Tour Saint-Jacques*, VIII (以下、TSJと略す), 1963, p. 130.
- 7 ブーランとアデル・シュヴァリエの関係については拙論「ブーラン元神父—オカルティスト？ 悪魔主義者？—マリア派異端とユイスマンス（その2）」、昭和女子大学『学苑』平成19年8月号（11）-（20）参照。
- 8 Marcel Thomas, «Un aventurier de la mystique: l'abbé Boullan, I.», in TSJ., p. 131.
- 9 J.-A. Boullan, «La divine Réparation», (Coll. Lambert), in TSJ., pp. 131-132.
- 10 J.-A. Boullan, «La divine Réparation», (Coll. Lambert), in TSJ., p. 132.
- 11 *Annales de la Sainteté*, avril 1873, p. 314.
- 12 *Annales de la Sainteté*, avril 1873, p. 315.
- 13 Richard Griffiths, *Révolution à rebours*, Desclée de Brouwer, 1971, p. 158.
- 14 「ブーラン元神父—オカルティスト？ 悪魔主義者？—」、昭和女子大学『学苑』、平成19年8月号（11）-（20）。
- 15 パラクレ（助け主）という呼称は、我々日本人には聞き慣れないが、「我々に助けを与えに来る者」という意味で、精霊の別称として用いられる。また、『ヨハネ福音書』などでは、「もう1人の助け主」という形でキリストの称号としても使われる。
- 16 *Opuscule sur les Communications annonçant l'Œuvre de la Miséricorde*, Tilly-sur-Seulles, 1841, p. 37.
- 17 *Opuscule sur les Communications*, p. 48.

- 18 *Voix de la Septaine*, t. III, Caen, Tilly-sur-Seulles, 1843. ヴァントラの信者は7人組のセプテーヌという単位にまとめられ、これが集まって大きな信者組織を形成した。セプテーヌは「7人組」ぐらいの意味。
- 19 *Sacrifice Provictimal de Marie*, Lyon, Imprimerie et lithographie J. Gallet, 1877, 27 pages. もともと Sacrifice は神に対して捧げられる「犠牲」。イエスの十字架上の死は、神の子が人類に代わって神の祭壇にささげられ、犠牲となったわけであり、カトリック教会のミサ典礼は、キリストの十字架の犠牲を再現し追体験することであり、Sacrifice はミサ典礼そのものを指すためにも用いられる。Pro-victimal は「犠牲を嗜好する」「犠牲となることを求める」ぐらいの意味。Sacrifice provictimal de Marie はこのセクト特有の冗語的な表現だが「マリアに捧げられる犠牲の弥撒典礼」ぐらいの意味だろうか？
- 20 この項、煩雑になるのでいちいち引用符をつけないが、Robert Amadou, «Présentation à "Sacrifice Provictimal de Marie"», in *TSJ*, p. 320 による。  
 例えば、A. ルモニエ A. Lemonnyer, J. M. ポイエ J. M. Pohier, R. シュブロン R. Sublon といった研究者は、精神分析の観点から、三位一体（父、子、精霊）の位格の一つである精霊の背後に、抑圧された女性的なものが入り込んでいることを予想している。つまり、父-子の関係を仲介する第三項として、精霊は「母性」的な存在だということである。基本的に男性の形作る父-子の関係に対して、教会-聖母マリア-精霊という女性的・母性的な対立を考えることもできよう。なお、ヘブライ語で精霊を意味する ruah という言葉は、女性形だという。「L'Esprit-Saint dans la perspective psychanalytique」『精神分析の観点からみた精霊』, in *L'Esprit Saint*, Faculté universitaire Saint-Louis, Bruxelles, 1978, p. 155 sq.
- 21 R. Amadou, «Présentation à "Sacrifice Provictimal de Marie"», *TSJ*, p. 320.
- 22 R. Amadou, «Présentation à "Sacrifice Provictimal de Marie"», *TSJ*, p. 321.
- 23 «La Vierge Marie», in *Voix de la Septaine*, t. III, pp. 28-29.
- 24 «La Vierge Marie», in *Voix de la Septaine*, t. III, p. 12.
- 25 «Sacrifice provictimal de Marie», in *TSJ*, p. 328.
- 26 «La Vierge Marie», in *Voix de la Septaine*, t. III, p. 26.
- 27 «La Vierge Marie», in *Voix de la Septaine*, t. III, p. 26.
- 28 «Sacrifice provictimal de Marie», in *TSJ*, pp. 336-337.
- 29 «Sacrifice provictimal de Marie», in *TSJ*, pp. 336-337.
- 30 «Sacrifice provictimal de Marie», in *TSJ*, pp. 335-336.
- 31 Joanny Bricaud, *L'abbé Boullan*, Chacornac frères, 1927, p. 48.
- 32 この他、Stanislas de Guaita, *Temple du Satan*, Librairie du Merveilleux, 1891 を参照。
- 33 Stanislas de Guaita, *op. cit.*, p. 448.
- 34 Stanislas de Guaita, *op. cit.*, p. 448.
- 35 Richard Griffiths, *Révolution à rebours*, p. 128.
- 36 Stanislas de Guaita, *op. cit.*, p. 448.
- 37 Stanislas de Guaita, *op. cit.*, p. 448.
- 38 Stanislas de Guaita, *op. cit.*, p. 448.
- 39 Stanislas de Guaita, *op. cit.*, p. 453.

（おおの ひでし 総合教育センター）